はる

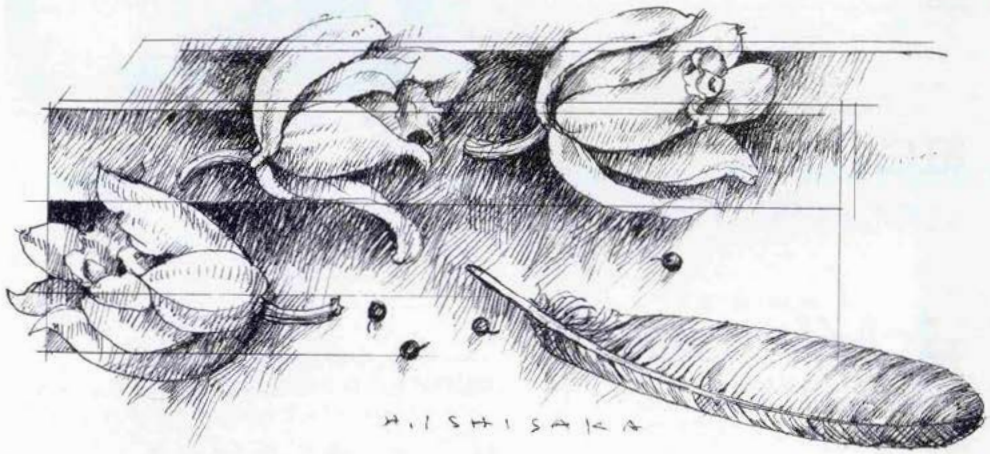
芦田はるみ

せがまれて
「はる」と地面に書いた
雪が溶けたばかりというのに
今日はこんなにも暖かい

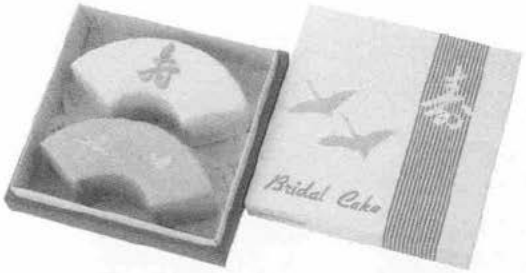
もう一度
「はる」と書いた
棒切れを拾ってきて
またせがむ
文字を覚えはじめたばかりの子

地面はいつの間にか
「はる」でいっぱいになりました

絵／石阪　春生



末広がりの扇型の
バウムクーヘンに
おめでたい紅白の
チョコレートで飾りました。



限定品

紅白バウム

¥1,200円

北欧の銘菓

株式会社 ユーハイム・コンフェクト

本　社　〒651-21神戸市西区北別府2－1－2
TEL 078-974-9756　FAX 078-974-9758

ブライダルギフト事業部・大阪　〒558大阪市住吉区苅田町7丁目12－19
TEL 06-697-9435　FAX 06-697-4188

佐本産科

SAMOTO CLINIC

ママといっしょに

赤ちゃん：戸田端樹くん（平成8年10月15日生まれ）
ママ：雅美さん
「生まれてくれてありがとう。ミルクを一杯飲んで元気で育ってほしい」

★佐本産科・婦人科★

佐本　学

神戸市兵庫区中道通4-1-15
TEL:078－575－1024（病室TEL:078－577－7034）
市バス上沢4停南スグ
●駐車場完備●

□私の意見

自立した市民「市民人」に期待

倉光　弘己
〈神戸大学教授・グループ名鑑「兵庫・市民人」調査隊代表〉

阪神・淡路を中心にした、兵庫県下のボランティア団体・NPO（非利益団体）の実体調査を、筆者が責任者である市民活動地域支援システム研究会（愛称『グループ名鑑「兵庫・市民人」調査隊』）が、現在進めています。市民がそういう市民活動に参加しやすくするためと、お互いの団体が知り合ってネットワークを作れるよう名鑑をつくろうというのです。同時に活動実体を分析し、どんな悩みや問題を抱えているか、さらにはこれらの活動を支援する策も、研究しようとしているのです。

ここで「市民人」という耳慣れない言葉に、怪訝な顔をされる方があるかもしれません。ふだんは何もしないで、何かあると行政に陳情するか、反対を叫ぶというのが、従来の市民活動の印象なのですが、阪神・淡路大震災のボランティア活動を契機にして、従来とは違うタイプの市民活動が姿を現し始めているのです。

行政に依存するのでなく、幅広い市民層を集めて自分たちの手で「良い社会」、「良いまち」、「楽しい地域」をつくろうという活動が始まっているのです。こういう自立した市民を「市民人」という造語で表現し、その市民人の活動の実体を調べようというのが、今回の調査なのです。

もともとボランティアとかNPOといわれる活動には、いろんなものがあります。臨時的なもの、恒常的な活動をしているもの、スタッフを抱えているものもないものもあります。活動分野も、福祉、災害救援だけでなく、文化的なもの、国際的なもの、環境問題、政治的提言を扱うものまで様々です。

きちんと決算が出来ているとか、活動実体が公表されているといった、一定の要件を満たした団体でなければ税金からの補助金を出せないという考えは、やむを得ないでしょう。これらの団体への寄付が課税控除されるために、別の要件が設定されるのも仕方ないでしょう。しかし、それはボランティアを正当なものと異端なものに色分けするものであってはならないと考えています。

神戸創生★36★ANNIVERSARY

月刊神戸っ子36周年記念文化賞／第7回受賞者発表

神戸っ子賞

月刊神戸っ子の創刊30周年を記念して「神戸っ子賞」を創設いたしました。分野を問わず、永年の活動の蓄積によって、神戸文化の振興とイメージアップに功労のある方に賞を贈らせていただきます。（授賞式は四月二十二日ホテルオークラ神戸にて）

東山　魁夷
（日本画家）

選考委員

小笠原　暁
米花　稔
石阪　春生
小泉　康夫

BM

月刊神戸っ子36周年記念文化賞／第26回受賞者発表

ブルー・メール賞

創刊10周年を機に神戸の文化を推進するために文化賞「ブルー・メール（青い海）賞」を創設いたしました。各部門別に選考会を開き左記の5名の方に賞をお贈りいたします。（授賞式は四月二十二日ホテルオークラ神戸にて）

◆文学部門

野元　正
（現代小説）

選考委員

馬部　貴司男
島　京子
竹内　和夫

◆音楽部門

「アート・エイド・神戸」音楽部門
〈プロデュース〉

選考委員
小石　忠男
出谷　啓
中西　弘則

◆美術部門

赤崎　みま
〈美術家〉

選考委員
伊藤　誠
中島　徳博
河﨑　晃一

◆舞台芸術部門

若柳　吉金吾
〈邦舞家〉

選考委員
佐野　漣箕
岡田　美代
山本　忠勝

◆ファッション部門

山本　芳樹
〈ホテルゴーフルリッツ
ファッションライブラリー館長〉

選考委員
藤本　ハルミ
鈴木　章子
小泉　美喜子

■ブルーメール賞協賛企業

財団法人井植記念会
UCC上島珈琲株式会社
NTTドコモ神戸支店
株式会社エルアイシー
関西西宮信用金庫
株式会社木下真珠
コーナン建設株式会社
神戸地下街株式会社
田崎真珠株式会社
にしむら珈琲店
株式会社ワールド

（順不同）

酔眼流旅日記 第9回

ベトナム青春旅行（二）

村松 友視〈作家〉

タンソンニェット空港からバスに乗り、私はとにもかくにもサイゴン市へと辿り着いた。私が乗ったバスは、報道写真でよく見たような、ぎゅうぎゅう詰めのあげく、屋根にニワトリの群れが入った篭がくくりつけられているようなやつだった。とにかく終点で降りよう……私は、サイゴン市の市場のあたりでバスを降りた。

バスの周囲に出迎えの人々が群がっていた。私を見て、こいつは何人なんだろうという顔を向けるものの、近寄って話しかける者はいなかった。私は、こういうとき変に居直るタイプで、月賦で買った紺のスーツにボストンバック一丁の装で、日活風の歩き方でバスから降りた。

足もとがぬかるんでいて、そろそろ暮れなずむ時刻……どうしてベトナムなんかへやって来たのかという後悔はふくれ上るばかり、このあとどうやって宿をみつけるのかの算段も成り立たないのだ。

すると、人混みの中からいかにもポン引という感じの小柄な男が進み出て、私の前に立ってじっと顔をながめたあと、

「アー・ユー・ミスター・ヤマモト？」

と言った。私は、もちろんミスター・ムラマツであってヤマモトではない。しかし、夕暮近くに戦場の街サイゴンに着いてしまったのだから、誰一人として伝手というものがない。せっかく声をかけてくれた男に、「ノー」と言ってしまったら、命の綱が切れてしまうような気がした。そこで私は、その男に対して「イエス」と言ってしまったのだから、いいかげんな話だ。

するとニヤリと笑ってうなずいたその男は、

「ドゥ・ユー・ハブ・ホテル？」

と言った。

「ノー」

今度は、私ははっきりと言った。これはミスター・ヤマモトとちがって嘘ではないのだ。男は、またもやニヤリと笑って自分について来いという仕種をした。もうどこへでも連れて行ってもらおう……私は、そんな気分で男のあとに従った。

男は、ミクロの運転手だった。男の運転するミクロに乗り、サイゴンの市内を走っているときの気分を、私はあまり鮮明に思い出すことができない。しかし、その心細さは凄かったのではなかろうか。

カット／灘本唯人
題字／筆者

ミクロがある通りの途中で停り、男は私にちょっと待っていろという表情を残してひとつの建物の中へ入って行ったが、やがて笑顔で戻って来た。指で丸印をつくっている。どうやらここが俺の寝ぐらしい……私は男にミクロ代を支払って、おずおずと建物の中へ入って行った。

薄暗い室内に、中年のオヤジが坐っていた。そこがホテルであるらしいことが、オヤジが坐っているレジのあたりの雰囲気で分った。一日いくらと聞いていくらと言われたのか、それも忘れてしまったが、安かったからそこに泊ることに決めたのだろう。

鍵をもらって部屋へ行くと、四畳半ほどの広さで、ベッドが二つあった。洋服入れのケースとシャワー室があり、浴室はなかった。しかし、とにかくこれで一夜の宿にありついたのであり、私は疲れがいっぺんに出てくるのを感じた。

日が暮れると、遠くの空で弾けるような音がした。屋上に出てみると、遠い夜空に曳光弾が幾筋か見えた。

（俺はベトナムにやって来てしまったんだ……）

そう思いながら部屋へ戻り、バッグからポケットウィスキーを取り出してひと口飲んだ。苦味はタンソンニェットで口にしたときと同じだったが、これから何かを食べないと眠れないだろうなと思い、下へ降りて行ってオヤジに教わったレストランでステーキを食べた。なかなか噛み切れないそのステーキは、どうやら使い古されて死んだ水牛の肉だったようだ。

〈むらまつ・ともみ〉一九四〇年東京生まれ。慶応義塾大学文学部卒。六三年中央公論社に入社。「小説中央公論」「婦人公論」「海」編集部員を経て、八一年退社。八二年「時代屋の女房」で直木賞受賞。主な著書は『私、プロレスの味方です』『百合子さんは何色』『アブサン物語』『激しい夢』など。

地域文化論

〈その201〉

京都恒例の関西財界セミナー
―神戸から想う

米花　稔
（神戸大学・福山大学名誉教授）

今年のテーマは「日本の大転換―構造改革なくして活路なし」

京都市内でも北寄りでよくある小雪まじりも今年はやや暖かい宝ヶ池の美しい庭園のある国際会館で二月六、七両日「日本の大転換―構造改革なくして活路なし」をテーマに第三十五回関西財界セミナーが、産業界トップ二百余名スタッフ層ふくめて五百名参加で開かれた。詳細は新聞報道もあり本欄はその場ではない。ただ一極集中の首都圏と異なり関西は京阪神という特徴的な多核心構造で、この会合も公式非公式の多様な交流があって楽しく有意義で、筆者もこの二十年ほど毎回出席の機会を得ているので、ここでその「神戸から想う」ことをとりあげさせていただく。

今年もふくめて例年神戸からの参加者は少く、京都からの積極的な発言に淋しく思ってきたが、本年は大震災から満二年でもあって、テーマの中心の「構造改革」に関連して、神戸の役割と支援が外からも強く示唆された。筆者の出席した分科会では神戸港の物的復旧にも、高コスト構造の故にハブ港機能がアジア諸国の港に移り始める懸念から、構造改革が強く指摘された。他の分科会では復興事業として国際競争力のある例のエンタープライズ・ゾーン（経済特区）の実現こそ、規制緩和、地方分権の突破口であると各方面からの発言があったようで、後者の指摘は、おわりの全体会議の合意事項として、提言の「構造改革の断行」のひとつに加えられた。

また印象的であったのは三人のパネリストによる集約討議であった。東京からの経済同友会代表幹事牛尾治郎氏は姫路出身であり、それに神戸大学法学部の五百旗頭真教授、また京セラの稲盛和夫会長らで、それぞれに刺戟的特徴的発言でまとめられた。最後の主催者を代表する関西経済同友会代表幹事山野大氏の閉会の挨拶で、京阪奈の関西文化学術研究都市のこれからの役割の強調と共に、今秋竣工の播磨科学公園都市の放射光研究施設への期待、明春開通の明石海峡大橋などへの言及のあったことは嬉しかった。なおこの世界一の機能をもつ放射光については、数年前このセミナーで当時まだソ連の頃の大使が同国の若い研究者のこの施設への期待へ言及のあったことも想起する。

この「神戸から想う」は地域エゴからではない。多核心構造の近畿なればこそとしての視点である。産業界の財界セミナーへの一層の出席を期待すると共に、神戸はいま国際交流の施設の復旧、さらに新施設の完成を見つつあるので、科学技術、文化、社会など分野は何であれ、ここを基地とする定例の広域的、国際的交流の毎年の集会など企画推進されることを期待したい。

会場になった京都宝ヶ池国際会館

光り輝くビジョンをもって

――未来へ結ぶネットワークの構築――

1997年度 社団法人 神戸青年会議所

ある集い■神戸青年会議所

開港一三〇年に魅力的な町づくりを

海と山に囲まれ、美しい自然に恵まれた神戸は、光り輝く都市（まち）です。

太陽の光に輝く水面、六甲の緑ははつらつとした神戸のシンボルです。そして夜、東西に伸びる光の帯は世界有数の光り輝く都市（まち）神戸を際立たせています。

神戸は市民すべての誇りです。

そんな神戸を再生する、いやもっと素晴らしい神戸を創造する。私たち神戸青年会議所の活動は、神戸への誇りを基盤に、未来へ向って神戸らしいビジョンであるべきです。私たちの作ろうとするビジョンは、市民・行政・企業や、様々な団体と共に考え、意見を交え、今まで以上の太いネットワークを築き、そのビジョンは必ず21世紀の神戸青年会議所の活動基盤になっていくでしょう。

今年の基本方針は、一、自己開発―出会いを積極的な交流のチャンスに。二、JCの存在意義を高め、未来社会への視点を役割を考え行動する。三、国際化、自由化、情報化の新時代の個性ある人づくり、街づくりの推進です。

今年は開港一三〇年。より魅力的で、全国、世界から多くの人々が訪れる市民参加型の街づくりで神戸の魅力を開発したいものです。（理事長／三條慶弥）

■〒650神戸市中央区港島中町／神戸商工会議所ビル

■特集対談／日本文化とファッションを語る

震災がきっかけに夢、実現へ

田辺　聖子〈作家〉
藤本　ハルミ〈ファッションデザイナー〉
司会／小泉美喜子〈本誌　編集長〉

★七月十日にパリでファッションショー

小泉　震災から三年目に入って、復興も本格的になってきました。神戸の被害は広く知られていますが、ここ伊丹も大変だったんですね。

田辺　阪急伊丹駅がひっくり返った映像が、すごく早い時点でマスコミにのって、外国にまで送られたのね。ローマに住んでいる友達がびっくりして電話してきましたよ。活断層の通っている地域からはずれていたので家は無事だったけど、中はそりゃもう、メチャクチャ。地下にある書庫

田辺聖子〈たなべ　せいこ〉
1928年大阪市生まれ、大阪樟蔭女子専門学校国文科卒。'68年「感傷旅行（センチメンタル・ジャーニィ）」で第50回芥川賞受賞、'87年「花衣ぬぐやまつわる…わが愛の杉田久女」で女流文学賞受賞、'93年「ひねくれ一茶」吉川英次文学賞受賞、'95紫綬褒章受賞。
主な著書に「田辺聖子長編全集」全18巻（文藝春秋）、「田辺聖子珠玉短篇集」全6巻（角川書店）、「新源氏物語」（新潮社）ほか200冊を越える。

の本なんか、東が西へ、西が東へという具合でね。一年くらいたってようやく片付きましたけど、いまだに調べたい本が見つからなくて、買い直すなんてことあるの。でも、もっともっとひどい目に会われた方が一杯いらっしゃるのだから…。ハルミさんも大変だったのよね。ベランダから飛び降りたんでしょ。

藤本　会下山にある築後六十五年もたった日本家屋でしたから、壊れるべくして壊れたという感じでした。山の傾斜地に建っていたので崖が崩れてきたら大変だと思って、エイヤッと。おかげでしばらく寝付くはめになりましたけど。

田辺　命には代えられませんよ。

藤本　でも、おかしいんですよ。そんな生きるか死ぬかのときなのに、天井が落ちてきたのを見て思ったことは、これはスピルバーグの世界やわ、岩が動いて中に閉じ込められるあれと同じやわ…（笑）。

田辺　それは映画の見過ぎよ（笑）。

藤本　震災のすぐあと、「神戸っ子」が、田辺先生と司馬遼太郎先生の文章を載せた号外を出しましたでしょう。あれに、どんなに勇気づけられたかしれません。周りでもそんな声をいっぱい聞きました。あれは、「神戸っ子」最大のヒットやと思うわ。

小泉　言葉がいかに大きな力を持つかということを改めて思い知りました。司馬先生が亡くなられたのもショック。あれから二年、本当にいろいろなことがありましたが、最近ようやく明るい話題が聞かれるようになりました。そのひとつが、この七月十日にパリで催される藤本ハルミさんのファッション・ショー。着物地を使ったドレスのショーを初めてパリでやると言うので、大変な関心を集めていますが、これも実は震災がきっかけになって実現したことなんですね。

藤本　パリには十八社から成るオート・クチュールの組合があって、サン・ディカルというオート・クチュールの学校を経営しているんです。そこの校長先生がマダム・ソーラという方で、これまでにも何回か日本にいらしてわたし

藤本ハルミ〈ふじもとはるみ〉
1927年神戸市生まれ、兵庫県立第二高等女学校卒。'49年東京神田駿河台文化学院美術部に学ぶ。'54年オートクチュール・マーガレット開店。'68年「明治百年を記念して、日本の古典を探る」日本の伝統素材による現代のドレス第1回の発表。'78年月刊神戸っ子・ブルーメール賞第1回ファッション部門受賞。'92年風月堂・第3回ロドニー賞受賞。
コウベファッションモデリスト会長・神戸ファッション協会参事・神戸ネオ・トロピカル協会代表幹事

もよく存じあげています。そのソーラ先生が震災後神戸に来られて、わたしのショーをパリですることに力を貸しましょう、と。先生、とても神戸がお好きで、神戸とパリはこれからもっと仲良くしていきたいというお気持ちが強いんですね。わたしのショーも、絆を強めるきっかけになればというお考えがあるのだと思います。

田辺　それはハルミさんの人柄もあるのよ。

藤本　オート・クチュール組合の会長、ムクリエさんとおっしゃるんですけど、その方にもソーラ先生が声をかけてくださったんです。そうしたらムクリエさんも、着物地で服をつくるというのはすばらしい、組合として後援するのはちょっとむつかしいけれど、ムクリエ個人の名前を後援者として使っていいと言ってくださったんです。何だか、最初に考えていたより話がずっと凄くなってしまって…。

田辺　本当に心のこもった応援ね。そういう後ろ盾がなければ外国に打ってでていけないものね。

藤本　自分の力だけでは、どんなにがんばってもできません。受け入れ態勢がしっかりしていることがわかったから、やってみようという決心がつけられたんです。

田辺　でもハルミさん、いよいよ夢がかなうんやね。

藤本　二十年前にわたしのショー「流れる季節に…」をやったときに、観に来てくださったんですよね。で、あとでお手紙いただいて、とてもいいからがんばりなさい、チャンスがあれば東京やパリでもやりなさい、必ず評価されますよ、と。わたしの仕事を認めてくださったんやわ、とすごく嬉しかったし、それが自信につながりました。

ジャックムークリエ氏〈パリ・オートクチュール組合会長〉と藤本ハルミさん

田辺　東京でもパリでも、どんどん出て行きなさいと言ったんよね。夢もたないとあかんよって。

★本番に向けて準備着々

小泉　この一月に、ショーの準備でパリへいらっしゃったでしょう。サン・ディカル校で実際に衣装を見せながら打ち合わせをなさったそうですが、あちらの反応、いかがでした？

藤本　何といっても向こうはオート・クチュールの本場で相手は皆プロでしょ。だから、わたしもかなり気負って、トランク一杯服を詰めていって見せたんです。そうしたら、わあ、いいねえ、と日本でショーをするときと同じような感じで、実に素直に受け入れてもらえました。着物の生地、帯地の美しさにはやはりびっくりしたようです。

田辺　そうでしょうね。あんなにきれいなもの、どこにもありませんよ。

藤本　予想していたよりずっと積極的で、この手のムードのものがもう二、三点ないのか、とか…。

田辺　例えば？

藤本　上布でつくったリゾート用のドレスを見て、これと同じように上等な夏向きの生地でリゾート風のものを、と。風呂敷を六枚、カットせずについでつくったツーピースなんか、どんな反応が返ってくるかと気掛かりだったんですが、おもしろいから是非出品しなさいと言われました。

田辺　手応え充分やったわけね。楽しいショーになりそうやないの。

藤本　でも、注文もいろいろでるんですよ。例えば、ミシンでバ、バ、バと叩いているようなところをみつけると、オート・クチュールのお客さんにこれではダメですと言われるんです。

パリ・サンディカル校学院長マダムソーラー先生と学生モデルにドレスを着せて

田辺　どうしなさいって？

藤本　手でまつり直しなさい。

田辺　うわぁ、大変。

藤本　持っていった服を向こうのモデル、ロシア系の色白で目も髪も黒くて、でも胸とお尻はバンと出ているような、すごくきれいな子に着せたんです。わたしには日本人に似合うようにという思いがあるので、わりと緩みをもたせてつくったものが多いんですけど、そういうモデルにはもう少しフィットさせた方がいいといって、サン・ディカルの教授がでてきて、ピッ、ピッ、ピッとピンを打っていくんです。それはもう、芸術的というか…。すごく勉強になりましたし、向こうがそんなに熱心にやってくれることが、また嬉しくて。

田辺　本物はどこへいっても通用するということよ。

藤本　今年も、それから去年の七月にパリへ行ったときも、オート・クチュールのショーを観たんです。今は大衆がファッションをリードする時代になっていますから、今更オート・クチュールでもないという方もありますけれど、技術はやはり最高なんですね。わたしなんか、なんとかパリのオート・クチュールの域くらいまで行きたいと思い続けてやってきましたから、観ていてハァーとため息がでてしまうんです。世界中からマスコミが集まってきて、ものすごい熱気でね。

田辺　そんなのが日本でできるようになって、世界中のお金持ちの女性がやってきて、日本で着物地の服とか注文するようになってほしいわね。

藤本　本当ですねえ(笑い)。

★「むつかしい」への挑戦から生まれる新しい発想

田辺　紫綬褒章をいただいて宮中へ伺ったとき、ハルミさんの服、着ていったのね。隣は有馬稲子さんとペギー葉山さんで三人三様の衣装だったんだけど、天皇陛下が会釈を賜るとき、他より長くこっちを見ておられたと思うわ。他は男性ばかりということもあったのでしょうけど、きっとハルミさんの服にお目が止まったんよ。あなたくらい、着物地や帯地の織りのことなんかをよく知っていて、それを使いこなすデザイナーはいないもの。

藤本　洋服は西洋から渡ってきたものですし、今でも素晴らしいものがたくさんありますから、皆さんがそれを頭において手掛けなさるのもよくわかるんです。でも、西洋人と日本人の体型って、やはり違いますでしょう。一番最初にヨーロッパへ行ったとき、あまりにも体型が違うのを見てすごいショックで…。そうしたら小原豊雲先生が、あんたが国賓としてオペラ座やミラノのス

教授とマヌカンに着物地のドレスを着せる

カラ座に招かれて行くとしたらどんなものを着ていくかを考えて服をつくりなさいと言ってくださったんです。それが、着物地や帯地を使ったフォーマルドレス、よそゆき着をつくるというわたしのライフワークになりました。

田辺　ハルミさんはすごいなあ、と思うところは、三十八センチという着物地の幅にとらわれずに、自由にどんどん発想を広げていくところ。有名なデザイナーで着物地を使って服をつくっいる人もいますけど、どうも細幅に振り回されている感じでね。カッティング次第でどんなふうにもできるのに、その工夫が見えない。

藤本　わたしは、テーマを自然に学んでいるんです。わたしの好きな海であるとか、波、雪といった自然の情景がまず頭に浮かんでくるんですね。で、例えば波だったら、歩いたらサァーっと波が立っているように裾を広くつくろうと思うんです。そうなるとやはり、立体裁断でやらないとダメなんですね。オート・クチュール的なつくり方というか、まず、まったく別の布でつくってからそれに生地を合わせて、地の目がどう通っているかを見ていくんです。

田辺　大変な手間やね。

藤本　裾にずっと柄があるようでも、三十八センチいっぱいにはついていなくて、無地の部分があるんです。それをつなげて柄が続くように裾広くもっていかなければならない。これがむつかしいですね。

田辺　むつかしいけど、だからこそ思いがけないアイディアが湧いたりすることもある…。

藤本　そう、その通りなんです。三十八センチ幅だからこそおもしろいものができる、という気持ち挑戦していこうと、いつも思ってます。以前に、京都で染めをやっていてファッション・ショーなんかもよくなさる方に会ったんですが、こんな裾の広いものができることに驚かれて。ぼく、洋服つくること知らんからなあ、と言っておられましたが、確かにまず洋服づくりがよくわかっていないと自由に形づくることができないというところ、ありますね。

★もっともっと知ってほしい日本文化の根っこ

藤本　行くたびに痛感するんですけど、フランスってやはりすごいですよ。国がファッションを産業として支えて、つくり手がファッションの原点を大事にしている。サン・ディカル校の授業もまさにそれで、ボディに白の木綿地でありとあらゆるもの、軍服までつくって着せるんです。日本の場合は、アパレルが主流になると、洋裁学校の方針もそれに合わせて変えてしまう。崩すなら、原点をきっちり学んでからにして欲しいと思いますね。そもそも、今の子たちって外国のことはよく知っているけれど、日本のことを知らなさ過ぎるんじゃないかしら。

田辺　文学でも同じよ。外国の作家のものはよく読んでいるのに、日本の古典はほとんど読んでいない。また、それを恥とも思ってないのね。文学をやる以上は、自分の国の文学をよく知った上で外国の文学を咀嚼するのが順序なのに、自分のところのものは食べず嫌いで、外国のものばかりおいしい、おいしいと言っている。その子たちが、自分のアイディアのつもりで発表するものなんか、「古今集」とか「新古今集」、「今昔物語」なんかにごまんと出ているのに、読んでないからわからないのね。まず自分の国の文化を知り、愛し、それから外へ目を向けてほしいと思うわ。

小泉　田辺先生、この春にロイヤルホテルで「源氏物語」の講義をなさいますね。申し込み数がものすごいということですが、日本のことを学びたいという気持ちが強くなってきている現れではないでしょうか。

田辺　ぜひ学んでいただきたいわ。よく、西洋は日本より文化が進んでるみたいな言い方がされるけれど、千年も昔に質量ともにあんなすごい文学作品、それも女性が書いたものなんて、世界中どこを捜してもありませんよ。それは自慢していいことだし、何よりもまず、もっともっと知らなきゃね。なのに、女性の文学者の中にさえ読んでいない

人がいる。光源氏なんて女を口説いてばかりいてどこがいいのか、みたいなことを言う。読まずに聞きかじっただけの知識しかないから、そんなこと言うのね。とんでもない。光源氏って、そりゃ奥の深い、すごい男ですよ。

藤本 文学でも、歴史でも、学校で教えないことがいっぱいあるでしょう。これは教育の問題になってくるのでしょうが。

田辺 明治維新で、どうしてあんなにすらりと変身して近代国家になれたかというと、それまでのすごい文化の蓄積があったから。頭で考え、気持ちの中でも耕し、外来のものを噛み砕きしてやってきた蓄積があったから、新しい西洋文化が入ってきたとき、なるほどそうか、とすんなり受け入れられたのね。

藤本 明治維新では、とくに若い人たちの力が大きかったんですね。

田辺 初めての英語も、彼ら漢学の素養があったから、文法的にすぐ理解できたのよ。社会、自由、民権なんていう新しい言葉も彼らが考えたんやけど、それも漢学をよく知っていたから。そういうふうでないと、新しい文化なんて簡単に受け入れられませんよ。それまでの三百年を引っくり返すのは天と地を逆にするくらい大変なことやもの。日本というのはこれほどの国なのよ、ということを若い子にもっと教えてやらなきゃ。

藤本 着物の型も長い歴史から考えればずーっと変化しつづけてきたのですものね。

田辺 おしゃれにも、深い文化の根があるわね。江戸時代の人たちって年齢、身分なんかに関係なく、皆すごくおしゃれだったのね。それがそのまま続いていたら、また違ったでしょうけれど、それまでのおしゃれ文化が明治でプツンと切れてしまったでしょう。突然、おしゃれなんかどうでもいい、体が丈夫ならいいみたいになってしまって。それでも、大正から昭和の始めくらいまでは日本らしいおしゃれ心みたいなのがあったけど、戦争があって戦後アメリカ文化がどっと入って来て、おしゃれの根元が枯れがれになってしまって…。日本人て、もともとおしゃれが大好きなんだから、ファッション文化がもうちょっと高まるといいんだけどね。

藤本 神戸の街は舶来文化が日本では一番早くから根づいた街なんだから、本物志向の大人が一杯います。若者に負けず頑張ってますよ。

田辺 それも、ファッションだけが突出っていうのではだめね。世の中が平和で、皆が仲良く暮らして、いい映画、お芝居、音楽なんかがあって、楽しいことがいろいろできて、おいしいものが食べられて…、そういうものの上にファッション文化が築かれないとね。そういう意味では、神戸のこれからの役割って大きいと思うわよ。ハルミさんもパリで頑張ってね。

（田辺邸にて）

●第七回 神戸っ子賞

神戸の誇り日本画壇の最高峰 東山魁夷画伯に

日本画壇の高峰を極める、東山魁夷さんは、横浜生まれの神戸育ち。

東京美術学校日本画卒、同校研究科修了、ベルリン大学哲学科美術史科に学び、昭和四年、第十回帝展にて「山國の秋」が入選。美校研究科で結城素明に師事。雅号を魁夷とする。八年、欧州留学。十四年日本画院第一席受賞。昭和二十二年日展で「残照」が特選・政府買い上げとなる。二十五年、日展出品の「道」で画壇をしのぐ社会的評価を受け、第一人者としての地歩を築く。昭和三十五年東宮御所大広間壁画「日月四季図」を完成、三十六年吹上御所御用命画、四十三年皇居新宮殿壁画「朝明けの潮」を完成。昭和四十四年文化勲章受賞、文化功労者。三十九年「冬華」、四十年「白夜光」、四十五年「雪の城」、四十六年「晩鐘」など北欧・ドイツの風光や、五十一年「桂林月夜」など中国の風景も描く。特に、昭和四十六年から唐招提寺御影堂全障画の制作は、五十六年に完成。昭和五十七年大規模な回顧展を開催した。

今春、大丸神戸店がリフレッシュ・オープンするに当り、〈卒寿を迎えて東山魁夷「私の森」〉展が、三月二日より二十五日まで作品五十点が展示される。オープンに花を添え神戸の震災復興に寄与される。この時に小誌の「神戸っ子賞」をお受け戴けることこそ誠に名誉の極みであります。

〈小泉康夫〉

■選考委員

小泉康夫
〈月刊神戸っ子社長〉

石阪春生さん
〈画家〉

小笠原暁さん
〈芦屋大学学長〉

米花　稔さん
〈神戸大学名誉教授〉

■選考経過

神戸が驚天動地の震災の被害を受けて、早くも満二年を経過した。

この時期に第七回「神戸っ子賞」の選考が行われた。震災復興委員会の座長として献身されている**新野幸次郎**元神戸大学学長、**亀高素吉**神戸製鋼会長、コープこうべの**高村勣**名誉理事長の名が挙げられた。

芸術分野では、画家の**東山魁夷**、**元永定正**、**西村功**。詩人の**伊勢田史郎**らの外、音楽の**辻久子**、書道で**望月美佐**、団体の**土井芳子**、ファッションの**田中千代**。俳句では**永田耕衣**、風刺漫画の**高橋孟**、の人々の名が挙げられたが、丁度この春々に神戸で展覧会を開かれる〈卒寿を迎えて東山魁夷「私の森」〉の東山魁夷先生にお受けいただけるものなれば是非お願いしようと満場一致で決まった。

〈文中敬称略〉

■歴代受賞者

1　淀川長治／映画評論家
2　朝比奈隆／指揮者
3　陳　舜臣／作家
4　宮崎辰雄／前神戸市長
5　中内　功／ダイエー会長兼社長
6　中西　勝／画家

●第二十六回 ブルーメール賞

《文学部門》

居住空間の象徴性

野元 正に

野元正氏の小説には、居住空間を象徴的に造型する特質がある。

例えば初期の作品に「円筒の家」というのがあるが、ホテル職員だった男が、ある日突然ホームレスとなって円筒型の下水道の中に住みつくという奇抜な設定である。

そんな彼が、大震災で被災した一家族を真正面から描いたのが、受賞作の「微妙な三角形」である。「三角形」が象徴するものはさまざま読み取れようが、そのひとつに矩形で構成された家屋が倒壊して、透き間にできた空間が三角形であったという認識がある。三角形の空間の中でようやく家族は生き残ることができたのである。

野元氏は公務員として公園緑地の設計や運営にたずさわってきた人である。自分が生涯かけた仕事として造りあげた公園が、市民の憩いの場から一転して緊急の避難場所となった事態には、独自の感慨があっただろうが、彼はそれを公人として対策に奔走する側から書かなかった。被災した鋳造工の家族が歪んだ空間の中から復興に立ち向かい、家族の姿を映したモニュメントを造ろうとする姿に、作者は自らの公私にわたる復興への勇気や決意をこめたのだろう。

大震災以来、多くの被災記が書かれたが、この作品は身近な被災体験を強いモチーフとして小説に昇華したところにも大きな意義が認められる。本年度の受賞が、格好の受賞作を得たことを喜びたい。

〈竹内和夫〉

■選考委員

竹内和夫さん（作家）

島　京子さん（作家）

馬部貴司男さん（作家）

■選考経過

今回は現代小説が対象。

候補には『微妙な三角形』の野元正、『指』の仙賀須義子、『ひとりでいること』の三田地智、『町の灯り』の佐伯敏光、『はてなし山脈』の竹中正らが挙がった。

震災から二年経ち、多くのルポルタージュが書かれたが、震災をテーマとしている作品が「小説」として構築されていること、作者がこの強烈なテーマのみだけではなく、以前からも、そして、今後も力強い作品を生み出していくだろうという点が評価され、野元正に決定した。

〈文中敬称略〉

■歴代受賞者

1. 詩　／中村　隆
2. 小説／鄭　承博
3. 俳句／小泉八重子
4. 小説／福本　早夫
5. 詩　／三宅　武
6. 小説／秋吉　好
7. 詩　／江頭　越子
8. 小説／桜井　利枝
9. 詩　／梅村　光明
10. 小説／吉保　知佐
11. 詩　／季村　敏夫
12. 小説／福岡　勝利
13. 詩　／時里　二郎
14. 評論／松尾美恵子
15. 詩　／武田　信明
16. 小説／山西　史子
17. 詩　／たかとう匡子
18. 小説／森　栄枝
19. 詩　／田中　紀子
20. 小説／夏巳ゆらこ
21. 詩　／渡辺　信雄
22. 小説／吉田　典子
23. 詩　／村中　秀雄
24. 評論／大塚　雅子
25. 詩　／増田まさみ

●第二十六回 ブルーメール賞

《美術部門》

色彩を新開拓 赤崎みまに

赤崎みまの作品は色彩の万華鏡である。微妙に入り組んだ色のかたまりが、幾層にも重なった薄い膜を通して光り輝いている。これまでも色彩を中心的テーマとして取り上げた美術家は多かった。彼らはチューブからひねり出した絵の具をキャンバスの上に塗り重ねることによって、「色」の持つ魅力と神秘とを探究したのだった。物質性と切り離すことのできないこうした状態でも、色彩の魔力は十分私たちを捉えることができた。それに対しヨーゼフ・アルバースは、色彩から可能なかぎり物質性を排除するため、透明なビニール・シートやシルクスクリーンを用いて色彩の相互作用を探究した。アルバースの仕事が厳密な幾何学的造形に基づいた理論的探究であったのに対し、赤崎みまの作品は直感的でなおかつとらえどころのないかたちの世界である。透明で流動的で光り輝くもの、それは私たちがこれまで体験したようで体験したことのない世界である。深さを否定しながら私たちを引きずり込む多／無次元の世界—それは写真というメディアによってはじめて可能な仕事といえよう。赤崎みまは、色彩の歴史に新しいページを切り開いたのである。

〈中島徳博〉

■選考委員

河﨑晃一さん
〈芦屋市立美術博物館〉

中島徳博さん
〈兵庫県立近代美術館〉

伊藤　誠さん
〈美術評論家〉

■選考経過

復興2年目を迎えた気持ちに反映するべく、作品にしっかりとした気構えが見える人が候補に選ばれた。絵画では、**天野潮彦**、**椿野浩二**、**大竹茂夫**、**上村亮太**、**赤松玉女**、**児玉靖枝**、**伴野久美子**、**翠紗**とともに、コンスタントに良い仕事を続けている**ユタカ順子**、風景画の**池田富恵**、静物画の**松井憲作**の名が挙がった。立体では、**井沢ひさこ**、**古巻和芳**。写真では、**赤崎みまと**東京でも絶賛され評判と人気の高い**小谷泰子**。陶芸の**重松あゆみ**など、全体として女性の活躍や作品の力強さが目立つことに注目が集まった。神戸元町のエキヴァレンスが写真専門ギャラリーとしてユニークな展示をしていることも選考の対象に。特に日本画の**西田真人**は、震災直後から復興のルミナリエまでを力強く描いた作品が印象深く、今回の受賞選考の最後まで残ったが、最終的には、大変質の高い現代美術を写真という分野で新しく表現し、今後の期待をこめるという意味で若い赤崎みまに決定した。

〈文中敬称略〉

■歴代受賞者

1. 彫刻／山口　牧生
2. 造形／丸本　耕
3. 洋画／小西　保文
4. 版画／藤原　向意
5. 平面／斎藤　智
6. 洋画／郷　相和
7. 洋画／山本　文彦
8. 造形／堀尾　貞治
9. 造形／榎　忠
10. 版画／松谷　武判
11. 平面／木下佳通代
12. 造形／宮崎　豊治
13. 平面／藤原　志保
14. 建築／武田　則明
15. 平面／石川　晴久
16. 平面／松原　政祐
17. 造形／植松　奎二
18. 彫刻／松本　薫
19. 造形／杉山　知子
20. 彫刻／田中　昇
21. 絵画／坪田　政彦
　絵画／木津　文哉
22. 版画／片山　みやび
23. 彫刻／牛尾　啓三
24. 絵画／中井　浩史
25. 絵画／奥田　善己

●第二十六回 ブルーメール賞

《音楽部門》神戸の文化復興と創造に力
「アート・エイド・神戸」音楽部門に

震災によって神戸の文化は壊滅的な打撃を受けたが、そこからさまざまな力強い動きが生まれた。「アート・エイド・神戸」の活動は、その代表的なものといっていいだろう。

元町の海文堂書店を拠点として発足したのが震災からわずか一ヵ月後。震災直後のチャリティー美術展による被災芸術家への緊急支援にはじまり、チャリティーイベントの売り上げや個人、団体からの寄付などによる「神戸文化復興基金」を創設。これを財政基盤に、震災後の芸術文化活動への支援・助成などを行ってきた。とりわけ、震災詩集の相次ぐ刊行は、「伝え、語り継ぐ」記録という意味でも意義深い。「阪神・淡路大震災で被災した人々を支援するために芸術家たちが自らの活動を通して、作品の販売や発表活動による収益を復興に役立てる」という狙いを地道に、着実に実践してきたといえる。

震災から丸二年。物理的、精神的な支柱として神戸の文化復興に果たした役割ももちろん大きいが、同時に「アート・エイド・神戸」がカンフル剤となり、従来以上に文化芸術活動が活発に、意欲的になっているのも見逃せない。中心的役割を果たした事務局長の島田誠氏は「短距離走のつもりがマラソンになりそうで」と語るが、文化の復興に加え、新たな文化の創造が求められる中、発信機能をあわせ持つこの運動体にかけられる期待はさらに大きくなるばかりである。

〈中西弘則〉

■選考委員

中西弘則さん
〈神戸新聞文化部
音楽担当〉

出谷　啓さん
〈音楽評論家〉

小石忠男さん
〈音楽評論家〉

■選考経過

昨年、あまり音楽界で目立った動きはなかったものの、地道な活動での評価が左右した。

鈴木雅明は演奏団体バッハ・コレギウム・ジャパンに属し、指揮者としてもチェンバロ奏者としても安定した実力を評価。**伊藤まさる**はリサイタルを精力的にこなしていた。新しく登場した**四方恭子**は、ドイツのケルン放送交響楽団のコンサートマスターとして活躍の国際派。昨年4月には神戸朝日ホールでリサイタルを行った。

今回受賞の**アート・エイド・神戸**は事務局長の島田誠、井上和雄、中西覚ら中心メンバーとの地道な活動が受賞理由となった。〈文中敬省略〉

■歴代受賞者

1. 田原富子／ピアノ
2. 矢野恵一郎／合唱指導
3. 上月倫子／バレエ
4. 今岡頌子／バレエ
5. 小石忠男／音楽評論
6. 中村茂隆／作曲
7. 関　晴子／ピアノ
8. 坂本　環／声楽
9. 山内鈴子／ピアノ
10. 松本幸三／声楽
11. 伊藤ルミ／ピアノ
12. 井上和世／声楽
13. 末広光夫／プロデュース
14. 安芸栄子／声楽
15. 延原武春／指揮
16. 中西　覚／作曲
17. 青井　彰／ピアノ
18. 広岡隆正／声楽
19. 戎　洋子／ピアノ
20. 大前　哲／作曲
21. 中野慶理／ピアノ
22. 田中修二／ピアノ
23. 岡本一郎／リュート
24. 畑　儀文／声楽
25. 釜洞祐子／声楽

●第二十六回 ブルーメール賞

《舞台芸術部門》 芽淳の海から太平洋へ 若柳吉金吾に

「芸の花は三十四、五から四十四、五までの十年が盛り…」と言い残した世阿弥の言葉に触発され、吉金吾の花を精一杯咲かせようと続けた十年のリサイタル。

若柳吉金吾さんの十年間はまるで芸術の神に魅入られたかのような献身の十年であったと思う。

たしかにこの十年は、彼の肉体と魂の中に、しっかりと蓄積されたことを感じる。

毎回挑んだ古典舞踏もさることながら、やはり才能をきらめかせたのは「素踊り」の分野で、他の追従を許さぬ一つの境地を拓いたと言えよう。

今から十九年前、藤間緑寿郎として、第六回ブルーメール賞を得て、芽淳の海に漕ぎだした舟は、いま大洋に向かって新しい出発をしようとしている。努力の人・若柳吉金吾さんに期待すること大である。

〈岡田美代〉

■選考委員

山本　忠勝さん
〈神戸新聞編集委員〉

岡田　美代さん
〈演出家〉

佐野　述箕さん
〈元神戸新聞取締役文事局長〉

■選考経過

日舞では、兵庫県芸術奨励賞を受賞した「流離流亡」の**若柳吉金吾**、忠臣蔵第八段「小浪」の**藤間莉佳子**がともに実力を発揮し、実績を伸ばした。神戸市文化奨励賞を受賞した**大和松蒔**は「薄紙を重ねるような」上達ぶりで、「鳥辺山」のひたむきさが光った。「雨の四季」の**花柳伊奈輔**も注目株。

能ではアメリカ空母上で「土蜘蛛」を舞った**上田貴弘**、狂言では**善竹隆司**が力を伸ばしてきている。

洋舞では、「ジゼル」全幕神戸初演の**貞松・浜田バレエ団**が抜きん出ているが、「おやすみ天使の歌を聞きながら」の**河合美智子**の構成と振付の巧みさが評価された。

演劇では「明日晴れる日」「猫からの手紙」の**須永克彦**が話題に。演劇が震災という現実を越えることの難しさも語られた。劇団神戸から枝別れした**4×（フォーエックス）**などはこれからの成長が望まれる。

映画では、**神戸100年映画祭**の開催が大きく評価された。

最終的に、個人リサイタルを十年続けてきた（戦後兵庫県で初）若柳吉金吾の実力と実績が圧倒的に評価され、全員一致で決定した。

〈文中敬称略〉

■歴代受賞者

1.邦舞／花柳芳恵一子
2.邦舞／若柳吉由二
3.能楽／吉井順一
4.邦舞／花柳芳五三郎
5.邦舞／花柳吉叟
6.邦舞／藤間緑寿郎
7.邦舞／尾上菊見
8.能楽／藤井徳三
9.仮名手庵歌舞伎／海野光子
10.演劇／コメディ・ド・フーゲッツ
11.モダンダンス／加藤きよ子
12.舞踏／藤田佳代
13.邦舞／花柳五三輔
14.映画／白羽弥仁
15.邦舞／松本尚蒔
16.笑クリエイト社／楠本喬章
17.フラメンコ／東伸一矩
18.能楽／久田徹二
19.邦楽／大和楽「蘭の会」
20.貞松・浜田バレエ団
21.邦舞／花柳芳圭次
22.演劇／劇団四紀会
23.バレエ／貞松正一郎
24.狂言／善竹忠一郎
25.邦舞／花柳小三郎

●第二十六回 ブルーメール賞

《ファッション部門》

神戸の街に似合う知的で優雅な時間を提供し続けてきた 山本芳樹に

（ホテルゴーフルリッツ ファッションライブラリー館長）

サロン・デル・リブロファッションライブラリーの設立は1989年3月であると伺う。そういえば、その頃からなんとなく心引かれるテーマを持つセミナーのお誘いをいただくようになった。幾つかふり返ると、「現代の美意識を世紀末に探る」「浮世絵に見る江戸のファッション」「葛藤する18世紀の異端者たち」「藤田嗣治とパリの日本人」「レクイエム・昭和の遺書」など。

それぞれに個性的というか、趣味性が強いというか、興味深いレクチャーが用意されていた。数多くのセミナーや研究会の通知をいただく中、思い返してみるとこの会はひと味違うような気がしている。

この集まりは（少なくとも私にとって）仕事や具体的な必要性に迫られた目的を持つのではなく、専門的な知識よりどちらかと言えば人文的な教養を追う「優雅で知的な時間への招待」のように思える。居心地のよいサロンで話を伺い、中休みにお茶をいただくひとときは心が華やぐような気がする。

このような講座を計画し人を集めるという事業について考えてみると、個々の講義内容の深さは講師のものであるが、話の広がりを予測し、引き出す力は企画者のものではないだろうか。この会のテーマの置き方や広がりはそのまま企画者の持つ視野の広さと想像力の豊かさを表わしているように思われる。独自のこだわりと美意識を感じる。厳しい時代だからこそ、いま神戸に望まれる心潤う生活シーン、山本芳樹館長はその演出者である。

〈鈴木章子〉

■選考委員

小泉美喜子
〈本誌編集長〉

鈴木章子さん
〈神戸ファッション専門学校校長〉

藤本ハルミさん
〈デザイナー〉

■選考経過

神戸ファッション専門学校の地下街のオープンスペースでの作品コンテストは若い世代の成長を期待させてくれた。**浦野年彦**はニットデザインで数々の大阪のコレクションに入賞、今後が期待される。ベテランでは、**藤本ハルミ**がパリでのファッションショーを企画中。新境地を開拓。ファミリア社長の**岡崎晴彦**はファミリアホールをオープンし子供服の世界を向上させる意気込み。**ハーバーサーカス**も新しい情報発信地として躍進したが、美意識を磨くことの大切さをコンセプトとした**神戸風月堂**のファッションライブラリーに決定した。

〈文中敬称略〉

■歴代受賞者

1. デザイナー／藤本ハルミ
2. 神戸市心身障害福祉センター／米田博司
3. ニットデザイナー／市野木悦子
4. コウベジュニアデーラーズ／KLTC
5. アートフラワー／太田タマコ
6. コウベファッションソサエティ／K.F.S
7. パール／「真珠の街・神戸」を考えるプロジェクトチーム
8. 家具／神戸市家具青年会
9. コウベファッションモデリスト／K.F.M
10. 書道家／望月美佐
11. コウベファッションクリエーターズ／K.F.C
12. ジャーナリスト／村上和子
13. デザイナー／中村一夫
14. 柴田グループ代表／柴田音吉
15. デザイナー／丹野最世子
16. デザイナー／大西節子
17. 旗の作家／福井恵子
18. メガネ／服部メガネ店
19. アートフラワーデザイナー／佐藤悦枝